

## 蘭学者 桂川甫周が、漂流民 大黒屋光太夫を尋問して生まれた書物のはなし

奥 正敬

### ■はじめに

江戸時代中期の寛政四（1792）年、ロシアからの使節が根室へ来航しました。彼らは鎖国体制の中にある日本へ通商関係の樹立を求めて訪れたものですが、同時にロシアに滞在していた日本人漂流民を送還する任務も担っていました。ロシアにとって通商交渉は成功しませんでした。ロシアに到着後に死亡した1人を除いた2人の漂流民は徳川幕府が引き取りました。このうち漂流民は江戸へ送られ、幕府の取り調べを受けることとなります。

この時、尋問で中心的な役割を担ったのが、蘭学者で幕府の奥医師、そして法眼でもあった桂川甫周で、漂流民たちから当時の最新のロシア情報を導き出します。

ここでは、今春、本学にロシア語学科が設立されたのを機に、図書館が収集・所蔵してきた「対外交渉史料コレクション」の中から、ロシアからの初めての帰国者、大黒屋光太夫たちに関わる桂川甫周の書物をご紹介します。

### ■蘭方医・蘭学者としての桂川甫周

桂川甫周（宝暦四[1754]年<sup>(1)</sup>-文化六[1809]年）は、名を国瑞<sup>くにあきら</sup>と言い、江戸の築地に生まれました。蘭方医で幕府の奥医師を務めていた父の国訓<sup>くにのり</sup>や前野良沢らから蘭学を学び、明和八（1771）年から杉田玄白らによって企画、推進されていた通称『ターヘルアナトミア』からの『解体新書』への翻訳・編纂作業にも18才で参加しています。そして、安永六（1777）年に若くして奥医師になります。

また、桂川はアーレント・フェートをはじめ、カール・チュンベリー、イサーク・ティチングなど江戸参府中のオランダ商館長や商館医師と面談し、一方ではオランダ知識の豊富な島津重豪<sup>しげひで</sup>や朽木昌綱<sup>まさつな</sup>など所謂、蘭癖大名とも交流を持って、新しい西洋知識を吸収していきます。

彼は蘭学者として幅広い活動をしており、医師として蘭書の訳述書を多く残しました。中でも天明六（1786）年の薬学関係の『和蘭薬撰』や、公刊が没後の文化十二（1815）年になった『海上備要方』などが代表視されます。

さらに、桂川は地理学にも関心を示し、天明六（1786）年にはオランダの地図学者ヨアン・ブラウの地図から『新製地球万国図説』を作り、次いで寛政三（1791）年にはヨハン・ヒュブネルの地図から『地球全図』を訳述して、当時の世界の国々の事情を理解していたようです。

こうして彼は、後世になって「寛政時代におけるわが国第一流の蘭学の権威」<sup>(2)</sup>と見なされるようになります。

### ■田沼意次から松平定信の時代へ

特に『新製地球万国図説』が作られた天明六（1786）年は、ロシアの南下政策を踏まえて、蝦夷地の開発調査を始めていた老中の田沼意次が罷免された年でした。その翌年には松平定信が老中職に就いて、厳格な社会への復帰を目指す「寛政の改革」に向かって動き始めていました。寛政四（1792）年になると、この改革の一環として幕府は、警世家である林子平が天明五（1785）年に上梓し、桂川が序文を書いていた